

序にかえて——なぜ無ではなく

世界が存在しない、という「事態」を考えよう。世界が存在しないということは、一切何もないこと、何かを容れる空間自体がないことを意味する。このような「事態」を人は想像できるだろうか。それを想像することは、想像すべき対象そのものの欠如によって、不可能である。試みに自らの誕生以前の世界を想起してみよう。その世界は端的に欠如しており、文字通りの無である。無を表象することとはつまり何も表象しないということである。ベルクソンの言うように、何かの欠如を表象することはそのものに置き換わる別のものの存在によって可能となる。それゆえ一切の存在者の欠如——無——を表象することは不可能なのである（ここからベルクソンは無という概念自体の不成立、破綻を結論する）。付言しておくなら、何かの欠如を表象するとき、われわれは世界に実在する欠如を表象しているのではない。欠如とはまさにわれわれの表象にすぎず、表象の内で完結している。それは当てにしていたものが見当たらないときのわれわれの失望の表明なのである（その失望は当てにしてい

なかつた諸々のものの存在（現前によつてもたらされる）。世界そのものの側にはいかなる欠如もない。実在はおよそ欠如や不足というものを知らないのである。それはあるがままにあり、それ自体で自足している。

さて、しかし、無が表象不可能であることは無それ自体の不可能を意味するであろうか。欠如なき世界そのものがまるごと欠如することはありえないことなのだろうか。ここで問われている可能性は世界の破壊可能性では全くない。もともと世界が存在していないという可能性である。それはありえないことであろうか。それが指示している「事態」が表象不可能であるから、この問いは問いとして失効していると言われるだろうか。だが、問われている対象の性質がいかなるものであろうと、問いそれ自体の有効性（有意味性）にいささかの影響もあるまい。われわれは表象しえぬものについて問いを立てることができる。はたして無はそれ自体として不可能なのか。つまりわれわれはわれわれの表象と関わりのない物自体としての無の可能性を問うている。物自体は存在するものとは限らない。無がわれわれの表象と関わりなくありうるものならば、それは可能性としての物自体なのである。無——表象不可能なもの——の可能性を思考しなければならぬ。

というか、われわれは無の可能性を思考せよとほかならぬ存在自身によつて要求されている。存在自身がその欠如なき充溢によつてわれわれを無へと差し向けるのである。無数の存在者が際限なく生滅を繰り返していく無限の時間の中にあつて、存在そのものは微動だにしない。というのも、あれこれの存在者の誕生や死滅はそのつど別の形（存在様式）の存在者への移行・交替にすぎないからである。存在者の交替によつて世界は変様する。だが変様を貫いて終始存在者が存在しつづけるのである。

そこに一刹那とて欠如が介入する余地はない。だがそうであるなら、なぜそのことに（ベルクソンは）驚かないのだろう。存在は始まることなく——なぜなら無からは何も生じないから——終わることもない永遠の生起である。これ以上の驚異はない。存在はこの上ない驚異であり、そうであるがゆえにわれわれは無の可能性を思考するように強いられるのである。

無——一切何もないという「事態」——においてわれわれを驚かせるような要素は何もない。無は窮極的に自明で単純な「事態」である。無が不可能であると思われれば、それはわれわれ——存在の支配に服したる者——が無という窮極の自明性と単純性を表象することができないというわれわれの側の無力を意味するにすぎない。実のところ、われわれは無の可能性を阻止すべきいかなる論理も持ち合わせていない。現に無ではなく存在が与えられていることにどんな理由があるにせよ、論理上無は可能なのである。それどころか、論理的には無こそ当然の「事態」である。無は何事でもない。何事でもないがゆえ無という「事態」には理由も根拠も要らず、また無を阻止するいかなる理由も根拠もありえない。これこそが自足である。一方、存在は何事かである——それどころか、この上ない驚異である——がゆえにその理由と根拠を要求される。だから、なぜ無ではなく世界が存在するのか、という形而上学の問いはあまりに当然の問いである。われわれはこの問いを問わずに済ますことはできない（存在を当たり前と考える人、何かが生じて当然と考える人がいたら、どうかしぼし立ち止まり、在りとし在るものはいったい何のために在るのか、と自問していただきたい。もちろんその答えは、何のためでもなくただ在るのだ、というものの以外にないでしょう。そしてこの答えは直ちに、ではいったいなぜ在るのか、という問いを引き起こさずにはいけません。この問いを避けることは

できないのです)。

現代哲学の大勢においてこの問いはその解答不能性のゆえに無意味な問いとして解消されたことになつてゐる。だが、解答不能な問いが必ずしも無意味な問いとは限らない。逆の場合——解答可能な問いが無意味となる——もありうる。早い話、件の問いに対して形而上学が創造主 \parallel 神の働きもつてその答えとするなら、問いは無意味なものへと変質するだろう。その場合、存在は始まりのあるもの(無から生じるもの)としてその原因が求められているのであり、問うに値する驚異としてのその本質を逸せられた上でいけば形式的に問われているにすぎない。つまり形而上学は存在を存在として問うてはいない——存在を忘却(ハイデガー)している——ことになる(そうであるなら、形而上学はその問いもろとも解消されてしかるべきである)。あるいはまた、現代の分析系の哲学——たしかにそれは問いを引き受けてはいる——のように、無を無数の可能世界の一つとして捉え、確率論的な議論によつて問いに答えを与えようとすることも、あらゆる可能世界の非在としての無の本質を逸した上でなされる形式的な議論にすぎない。なぜとていう存在の根拠への問いは解答不能であるからこそ意味である。この問いは存在の支配がわれわれにおいて播らいてゐることを示しており、答えへと至ることのないまま問いそれ自体において決定的な意味を——少なくとも哲学にとつて——有している。哲学は何より思考を拘束・支配するものから思考を解く試みであるからであり、存在こそわれわれの思考を根底から拘束・支配するものであるからである。その支配は思考がもはや存在の根拠を問うことをしなくなつたとき完全なものとなるだろう。それは同時にニヒリズムの完成でもある。存在の根拠を問うこと、つまり無の可能性に思考を開くことはニヒリズムでは全くない。その反対である。

ニヒリズムの本質は、ハイデガーが正しく観て取ったように、存在の忘却＝覆蔵にあるのであって、存在の無根拠を暴くことにあるのではない（なお、ハイデガーにとって無の可能性は存在の本質を構成するものとして存在自身に内属している。それゆえハイデガーにとって無の可能性の開示が存在の支配を動揺せしめるなどということはありえない）。

無は何事でもない。無においては一切何もないからである。一切何もないから何かが成立することができないのである。では、なぜ何も成立していないことが自明で単純な「事態」なのか。自明性（単純性）とは、なぜという根拠への問いが発動しないことであるからである。いかなる事態も成立していないなら、われわれがその根拠を問い求めることはない。そもそも何も成立していないという「事態」をあらしめるための根拠などないからである。ただし、この議論では、根拠という概念を限定しておかねばならない。根拠とはある事態をしかるべき事態として成立せしめている働きである。それはあくまで当の事態において働いている根拠であって、その事態に先行し、それを生ぜしめる原因ではない（例えば地震で家が倒壊したとき、地震は倒壊の原因ではあるが、ここで言う根拠ではない。倒壊の根拠は、倒壊という現象においてつねに働いているもの、それなくして倒壊という現象が成立しえないもの、つまり重力である）。何であれ、何らかの事態が成立するためにはしかるべき根拠＝働きが必要である。いかなる働きもないならば、何も成立しない、つまり自明で単純な「事態」に帰するということである。世界は、いかなる働きもなく打ち捨てられるとき、無に帰するのである。無ではなく世界が存在するという事態が成立しているならば、そこにそれを成立せしめているしかるべき働きがある。もちろん、この働きは物理的な働きではありえない。物理的な働きがあ

るためにそもそも存在者（世界）が存在していなければならぬのであって、その逆ではない。存在者（世界）の存在は一切の物理的な現象を可能ならしめる根拠として、それ自身物理的な現象ではありえず、また自らの根拠を一切の物理的現象の外に置くものである。さらにまた、存在者（世界）の存在を可能ならしめる働きが存在者（世界）自身に求めることはできない。なぜなら存在者が当の働きをなすためにはともかくも存在していなければならぬからである。そういうわけで、存在自体が自らを成立せしめている働きであるということになる。ならざるを得ない。存在は他に根拠を仰ぐことのない——つまり無根拠な——自己生起なのである。存在は自らによってあり、自らにおいてある。存在自身が無を排除し世界を存在せしめている働きなのである。これは比喩ではない。文字通りにそのようなのである。そのためわれわれにとつて存在の驚異は一気にせり上がり、存在の根拠への問いはいよいよ切迫したものになる。なぜ無ではなく存在なのか。なぜ世界は無の自明性を打ち捨て、自己生起する存在の側についてのか。

繰り返そう。世界が成立しているかぎり、それを成立せしめている根拠としてのしかるべき働きがある。存在とはこの働きにほかならない。いかなる働きもなければ何も成立せず、世界は無である。無においては何も成立しておらず、それゆえなぜ無なのかなどその根拠が要求されることはありえない。これこそが自明でオリジナルな「事態」である。例えば、リングが木から落ちるといふ事態が成立しているならば、なぜリングが落ちるのかその根拠が要求される。つまりリングが落下するといふ事態は自明ではないということである。全く同様に、世界が存在するといふ事態が成立しているなら、なぜ無ではなく世界が存在するのかという根拠への問いが発せられる。だがこの場合、自明性の

低さ（欠如）はリングの場合の比ではない。なぜなら世界の存在はリングの落下を含め一切の事態の窮極根拠——諸根拠の根拠——だからである。それは諸々の事態の窮極根拠として成立しているいわば最も問い質すに値する超一事態である（ここで世界という用語は、一貫して、われわれの関与なしに実在する世界、際限なく時間を遡ってもつねにすでに存在している世界、つまるところ物質世界の意味で使われている。われわれが世界の存在様態ではなく、純粹にその存在そのもの、それが在ることそのものを問題とするとき、世界はわれわれの住まう環境としてのその有意味な相貌を失い、単なる物質世界として立ち現れるのである）。

人は、無ではなく世界が存在しているのは単なる偶然である、と言うだろうか。だが、存在と無の比較を絶した差異を考えるなら、存在を偶然とする臆見をわれわれは受け容れることができない。何度も言うが、無は窮極の自明性であり、世界の存在は窮極的に自明性なき生起である。だから無ではなく存在が与えられているという現実が驚異であり、その驚異は偶然性という表象と折り合うことができない。なぜか無の自明性が打ち捨てられ、存在者が存在するという自明ならざる事態が始まることなく終わることなく永遠に生起している。はたして存在のこの言語道断の生起が偶々与えられているなどということがあろうか。それだけではない。世界の存在が偶然に与えられているという理解は、それが与えられていないこと（無）が現実、にありうるという理解にほかならない。しかるに存在が与えられていないことが現実にあるという理解は、そもそもいかなる事情の下に現に存在が与えられているのかを知っていることを前提としてはじめて可能となる。どんな事情で存在が与えられているのかを（あるいは仮にいかなる事情もなく存在が与えられているとすれば、そのことを）知らない

のに、それが与えられないこともありうるなどとわれわれは言うことができぬ。そして実のところわれわれは存在が与えられている事情など——その有無を含めて——知る由もない。それゆえわれわれは世界の存在が偶然に与えられているなどと決して言うことができない。

たしかにわれわれは無の論理的、可能性を知ってはいる。論理上無の可能性を阻止するいかなる根拠もありえない。だが、無が論理的に可能であることは存在の偶然性とイコールではない。論理的に可能なことが何らかの現実的理由によって阻止されることもあるからである。そしてその場合、もしもその現実的理由が除去不能だとしたら、無は現実的に不可能であり、存在は必然的に与えられていることになる。いづれにせよ（それが除去不能であるかどうかはともかく）、われわれはその理由——現に無ではなく存在が与えられているしかるべき理由——を要請する。自己生起としての存在には生起する理由——存在自身が担っている理由——があらねばならない。たとえその理由をわれわれが知りえないとしてもである（われわれのこの無知を理由そのものの欠如と取り違えてはいけぬ）。恐らくわれわれがその理由を知ることが永遠にないだろう。存在の驚異はわれわれのその無知に起因している。だとすれば、われわれにとって存在は永遠に驚異でありつづけるにちがいない。したがって、なぜ無ではなくという形而上学の問いが解消されることは永遠にないだろう。

存在は自己生起であるから、生起する理由は存在自身が担っていなければならない。つまり存在には無ではなく存在自らを是とする固有の論理があり、その論理が存在生起の理由を担っているのである。存在の論理という言い方について若干の説明が必要であろう。先の例を持ち出すなら、リングが木から落ちるといふ現象にはしかるべき理由——重力の存在——がある。それはつまり重力という性

質を在らしめる構造Ⅱ仕組が物質世界に、少なくとも今のところ、備わっているということ、言い換えれば、重力のある世界を、しからざる世界との区別において、肯定する論理が世界の側にあるということにほかならない。この論理がなければ重力などありはしない。同様にして、世界が存在するという事態が与えられているなら、それを、無との対比・区別において、肯定する論理が世界ならぬ存在の側に——なぜなら世界は存在によつて与えられるものにすぎないから——あるということである。存在固有のこの論理がなければ世界など有りはしないのである。無ではなく存在が与えられているしかるべき理由と論理が——われわれの外に、つまり実在の側に——ある。それゆえ世界の存在は偶然ではない。

整理しよう。先の議論で、世界を在らしめているしかるべき働きが要請され、その働きは存在それ自体であると結論された。だが、この結論は存在の根拠への問いにさらなる拍車を掛けるものでこそあれ、問いを解消するものではなくない。存在自身が世界を在らしめている働きであるとして、ではなぜ無ではなくそうした働きとしての存在が与えられているのかという問い——これが存在の根拠への問いである——は依然として結論を得ないまま継続している。この問いに対してたつた今出した暫定的結論が、存在の根拠Ⅱ理由は存在自身の論理が担っている、というものである。その論理は無ではなく存在を是とする論理である。現に世界が存在しているかぎり、必ずやそれを無との対比において肯定する論理が実在の側にある。つまり世界が存在するという事態にはしかるべき理由があるのである。ただこの理由がわれわれの関知しない理由であるため、以上はあくまで根拠への問いに対する暫定的な解答にすぎない。つまり問いは依然として解消されていない。しかしともかくも世界の存在

は偶然ではない。

では、無ではなく存在が与えられてあることは必然なのだろうか。無の可能性を阻止する、存在の担っている理由は除去不能なのだろうか。存在の論理にとってはそうである。その論理は世界の存在をまさにしかるべき——当然の——事態となす論理なのだから。だがその論理はわれわれの論理とは相容れない。われわれの論理は無こそまさにしかるべき「事態」であるとする論理であり、この論理の外にわれわれは出ることができない。だからわれわれにとって世界の存在は必然ではありえない。つまりわれわれは存在の論理を理解不能なものとして棄却するのである。棄却は否定ではない。理解不能なものを否定することはできない。われわれはただそれに関知しないのである。そういうわけで、われわれにとって存在は偶然でも必然でもない。われわれは存在の偶然性という臆見を斥けるべく、存在をまさにしかるべき事態となす論理（理由）を要請したのだが、その論理（理由）自体をわれわれは、仮にそれがわれわれに提示されたとしても、受け容れることができないのである。だがしかし、存在の論理とはつまり実在の側の論理——無ではなく世界が存在するという紛れもない事実がその下に与えられているところの論理——である。この論理が誤ることはありえないのだ。それは実在そのものが携えている論理なのだから。それゆえ世界の存在は必然である（もちろん、それは存在を必然たらしめる存在の発生根拠＝原因があるという意味ではない。存在に始まりはなく、それゆえ存在はその原因をもたない。存在は無よりも前につねにすでにあり、それ自身の根拠たるものとしてその必然たるゆえんを自ら担っているのである）。だが、繰り返しすが、それはわれわれの理解しえない論理による必然性である。われわれにとってそれは必然性たる意味を失っているのである。

そういうわけで、存在は驚異であることをやめず、われわれは存在の根拠への問いをやめることができない。われわれには世界が存在するいかなる根拠も与えられていない。つまりわれわれに対して依然として無の可能性は開かれている。存在自身が自らの根拠・理由を担っていることは、われわれにとつて、存在が無根拠に生起していることと区別がつかない。存在が自らの根拠であるとしても、そのためにはともかくもまずその根拠たる存在自体が与えられていなければならない。こう言う、いや、ともかくもまず存在が与えられているというそのことがまさに存在による自己生起なのだ、という反論が存在の論理の側からあるだろう。だが、その自己生起に対して再びともかくも……という先行条件をわれわれは要求せざるを得ない。この後退には際限がない。つまるところ、存在は無根拠に与えられている自己生起なのである。それは偶然性なき無根拠である。なぜならその無根拠は単に存在の根拠がわれわれに与えられることはないという意味ではないからである。世界の存在はいかなる原因にも根拠にも先んじてつねにすでに与えられている根拠なき自己生起である。窮極根拠としての世界の存在がそれ自体無根拠であることにより、一切の存在者の存在が、それゆえわれわれ自身の存在が無根拠に与えられることになる。われわれは底なしの自由へ開かれる。

もしも世界の存在にしかるべき根拠があるなら、それは無数に分岐する因果の連鎖を一気に下つてわれわれ自身の存在を根拠づけていることになる。要するにわれわれの存在にはしかるべき理由があるということになる。逆に、世界の存在がその根拠を欠くなら、たとえ世界からわれわれへと至る因果の連鎖が無傷のまま存在するとしても、われわれの存在にはいかなる理由もないということになる。われわれが底なしの自由へと開かれる、とはつまりわれわれの存在にいかなる理由もないという

ことにほかならない。これはいわば神の不在にも比せられる事態である。われわれは何をやっても許される。それを禁ずる窮極の根拠＝理由が不在なのである（現実には神の名の下にあらゆる愚劣が行われていることはこれに対する反論にならない。神の名の下に事を行うとはつまり神の欲望を代行する——神はコレを望んでおられる——ことにほかならず、それはまさに当の欲望が不在であるからこそ可能なのである。人はそれが不在であるがゆえにそれを欲望する——神の欲望を欲望する——のであり、不在であるがゆえにあらゆる愚劣と悲惨が神の欲望するところとなりうるのである）。

われわれは自由である。その自由はわれわれ自身の存在の無根拠（理由の不在）に由来している。われわれの行いを禁ずるものは何もないが、その行いに最終的（窮極的）な理由や目的を設定することは禁じられている。つまりそれは不可能なのである。われわれは、存在の無根拠を了解しているかぎり、自らの生につまるところ理由も目的もないということを理解してしまっているからである（理由や目的を欲望することはそれが不在であること、その不在をわれわれが知っていることの証左にほかならない）。われわれの生は理由や目的といった観念、そしてそれが誘発する生の意義や価値といった観念の軛から解かれている。われわれは今ここにないもののために今ここに存在する生を生きることを良しとしないのだ。われわれは理由なく目的なく今ここに存在する生と戯れることを己れの喜びとする。自由であるとはそういうことである。

繰り返し述べたように、いかなる事態にもそれをまさにしかるべき事態となす相応の理由がある。世界の存在、それゆえわれわれ自身の存在もまた相応の理由の下に与えられている。それを否定することはできない。だが、その理由を与える論理がわれわれの論理の外にあるがゆえに、われわれにと

ってそれが理由としての意味を失つているとしたら、やはりわれわれの存在にはいかなる理由も与えられてはいないということになるであらう。ならざるを得まい。存在の理由はある。だがそれはわれわれにとって理由ではない。われわれにとって一切の存在者の存在はその理由を欠いている。繰り返すが、われわれは存在の理由を否定するのではない。ただそれを関知せずとして棄却するのである。なぜ無ではなくというわれわれが執拗に存在へと投げつける問いはこの棄却の身振りにほかならない。執拗なその身振りによってわれわれは自らを存在の支配から繰り返し解かんとしているのである。

さて、以上が存在への問い（と筆者が考えるもの）のさわりである。前書きの段階で本文の主要な論点を先取りする形になつてしまつたが、致し方ない。ここに示された存在に対するいささか否定的とも言うべき思考の構えから筆者は抜け出すことができない。何よりもまず思考のその構えを提示しておきたかつた。だが、その構えと関わりなく言えることは、存在への問いこそが哲学を駆動するということである。存在の根拠への問い、無の可能性への問いへと思考を開くことから哲学は始まる。つまりそれは存在論という哲学の一分野における特異にして無益な問いなどでは決してなく、およそ哲学（すること）のそもその前提なのだ。哲学が己れに何を課そうと、その前提に自らの存在の根拠への問いを置かねばならない。そのことによつて哲学は初めて自由な営為となり、真理を求めるといふその営為において自らが生と戯れていることを自覚する。哲学はいわば存在と無の問いの洗礼を受けてのちようやく自らの営みを無益で純粹な喜びとして享受することができるのである。